

〈研究ノート〉

## 近世布引村の開発と和歌浦湾東部の景観

藤 本 清二郎

はじめに

文明一八年(一四七六)の蓮如筆「紀伊国紀行」に「藤白や嶋ヤ小嶋ヲナカムレハ<sup>(一)</sup> タ、布引ノシロキハマ松」とあり、また天正一三年(一五八五)秀吉が紀州平定直後に玉津島に参詣し、「打出でて玉津島よりながむれば<sup>(二)</sup> みどり立ちそふ布引の松」「紀州御発向之事」とある。いづれも松の枕詞として「布引」が使用されており、それ以前より「布引」という地名が存在した。<sup>(三)</sup> 現代においてこの布引は毛見から続く砂丘上にあるとの指摘がなされているが、古くから継続してそうであったのかについては検証がいるように思われる。<sup>(四)</sup> この近世初期の「布引」の意味する内容について検討するのが本稿の第一の課題である。

『紀伊続風土記』によると、名草郡の「布引村」は「三葛村新田」で、村高六一六石五斗八合とある。一九世紀初め頃の内容を記したものであるが、遑って、一七世紀初め慶長一八年(一六二三)の「紀伊州検地高目録」にはその村名が見えない。<sup>(五)</sup> では、布引村は何時頃形成され、村高を有する村となったのであろうか。明治初期作成の「布引村図面」を手がかりに、この点について検討するのが本稿第二の課題である。



明治19年(1886)「参謀本部陸軍部測量局作成二万分一仮製地形図」(柏書房『明治前期関西地誌図集成』収録)和歌山・海南より作成。一部加工。

第1図 布引村周辺の地形図

さらに、和歌川の環境変化が布引村と周辺村々の塩浜経営、耕地維持管理に与えた影響についても若干の検討を行う。

上記三点を検討するための史料は、慶長二〇年(一六一五)頃に描かれた名古屋城本丸御殿対面所次之間障壁画と、明治初期に描かれた「布引村図面」・「三葛村図面」および布引村を含む名草郡吉原組の「御用留帳」類(桑山家文書)<sup>8)</sup>である。布引村周辺の地形を知るために明治一九年(一八八六)の地形図を掲げておく(第1図)。

一 近世初期、和歌浦湾東部の景観

(1) 「布引の松」―名古屋城本丸対面所障壁画の分析―

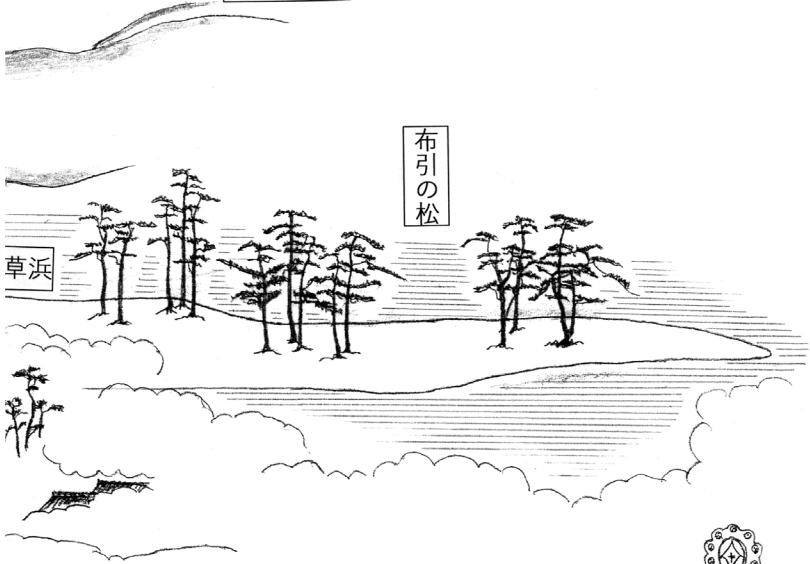
名古屋城本丸対面所次之間の東西南北四面に描かれた障壁画(襖絵と壁画を総称)がある。慶長二〇年(一六一五)、紀州藩主浅野幸長の娘春姫が尾張藩主徳川義利(後義直)に嫁ぐに際して、婚礼儀式が行われる本丸対面所次之間四面に、狩野甚之丞が紀ノ川・和歌山城下・吹上浜・天神社・玉津島社・紀三井寺の風景と風俗を描いた。この一連の障壁画は一七世紀初め頃の和歌浦湾内(西天神山から東毛見崎)の景観を知る上できわめて重要な史料である。<sup>(9)</sup> 遠い地へ嫁いだ春姫を慰めるため描かれたもので、天神社・玉津島社の社殿はそれぞれ慶長一〇年・同一一年(一六〇五・〇六)に造立されたが、これらの社殿がそれぞれ北壁面・西の襖に描き込まれている。西側襖絵の南端の襖には紀三井寺と推測される寺院境内・門前町等が描かれている。<sup>(10)</sup>

次之間の西面には四枚の襖絵が存在するが、第2図は向かって左(南半分)の布引松・津屋・紀三井寺・三葛浜の描かれた二枚の襖絵原画写真を鉛筆でトレースしたものである(文字貼込は筆者)。両サイドに襖の取手が見えるが、中央部で左右の襖の境目がある。この襖絵(二枚)に描かれた絵の構成を検討し、当時の景観を分析する。

まず襖絵左上には紀三井寺が描かれているが、おおむね北西方角から見た絵となっている。<sup>(11)</sup> 境内には僧侶や掃除をする使用人など同寺関係者が描かれ、また境内南西の崖上では供連れの武家が遠方を眺めている。視点の先は淡路島か四国徳島方面の海上であろう。寺の麓には西から山門に向かう門前の道があり、その道沿いには南北両側に商いの店が並び、参詣者が山門に向かい、また山門とは反対方向へ芝草を積んだ馬牽きが移動している。

門前より少し西の辻では南北の道と交叉をしているが、この道は和歌山城下から熊野に通じる街道で、街道集落

下津・大崎



布引の松

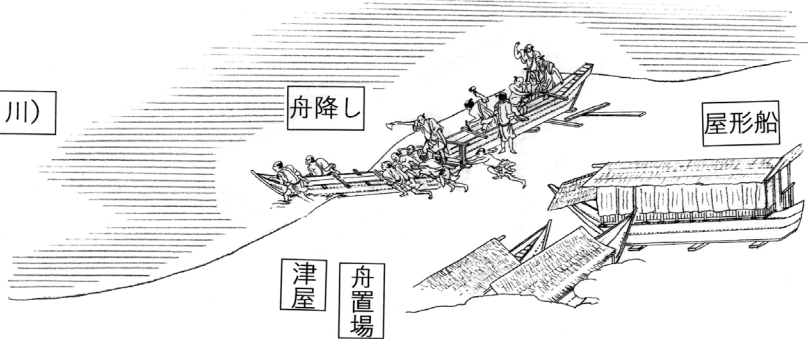
草浜



ノ川)

舟降り

屋形船



津屋

舟置場



「名古屋城本丸御殿対面所次之間障壁画」(名古屋城総合センター所蔵)をトレース、加工して作成。

第2図 名古屋城本丸対面所次之間西面襖絵

の家々が描かれている。路上で薪を割る人々や天秤棒前後の売り物をひさぐ商人の姿も描かれている。このように門前とその近くの路上には多様な人々の行き交いの様子を表現している。正に門前町の風景が描かれている。<sup>12)</sup>

次に、左右襖絵上部の山々についてみておこう。左襖の左上部の二こぶの山(貼込「紀三井寺」が一部重なる)は、紀三井寺のある名草山との間に金雲が描かれており、室山であろう。木立が描かれており、以下に述べる山々より近いことを示している。<sup>13)</sup> その向こうの山にも木立が描かれているが、相対的に近いことが暗示されており、船尾山(毛見山)が想定される。その向こうの少しとがったより高い山には藤白坂や「御所の芝」・「筆捨松遺跡」がある藤白の峯であろう。その右手の大きな山は下津・大崎を抱える峯であろう。<sup>14)</sup> 稜線裾部の描き方において、それらの前後関係(手前と向こう)の処理において若干不正確な表現がある。なお右上部の稜線の手前や右端はほぼ全面的に金雲で隠されており、海上風景は省かれている(トレース図に金雲は記していない)。

さて、襖絵右上部には海上に「布引の松」が大きく描かれている。左の名草山・紀三井寺の麓から少し離れた海上の位置にあり、襖絵の右上部はこれがほぼ全体を占めている。より詳細に述べれば、細長い陸地に一三本の松が带状に並んでいる。土地は砂状と推測される。砂帯の向こう側と手前側(絵の上と下)には群青色に着色された海があり、海の中に砂帯が存在することが分かる(そのように描かれている)。この砂帯は左の襖絵の上部(右端)向こう側の山々の手前にはこの砂帯の左続きと海の左続きが確認できる(トレース図では貼込「名草浜」の左部辺り)。原図(写真)では群青色の顔料がおちて、一見ただけでは判然としないが、よく観察すると海を示す群青色の連続を確認することができる。この群青色の着色部分を第1図では横線で示した。

この海上部の左端部(貼込「名草浜」の左横、および貼込「毛見崎」の下部)には、群青色の海上に接して、岩場とおぼしき形状が描かれている。通常稜線を示す線画の山側(山の端)に着色が見られる。原画写真では脱色して白っぽいが元の色は不明である。この表記が、この貼紙「毛見崎」の右から下部にかけては線画の陸側に着色されて

いる(山の端状のものが下向きに描かれている)。この描かれ方は岩場が海上に突き出ている状態を示すと考えざるを得ない。すなわち岩場の磯と理解され、毛見崎の磯が表現されているのである。

襖絵右上部の図像は紀三井寺の描き方(方角)とは違い、東南向きから九〇度転じて西南向き、さらに西向きの景観を描いている。砂帯(南北と推定)の向こう側の海は和歌浦湾であり、図中央部(襖の合せ目)砂帯の向こう側の岸(海浜)は名草浜と理解される。すなわち、この毛見崎の手前(図下部)に海があり、その手前(図下部)に名草浜があるように描かれている。この配置は、現在北から南を見た地形と一致する。

さて、問題は砂帯の左端の形状であるが、残念ながら金雲で隠され不詳である。不詳ということは、毛見崎と名草浜・布引の松のある砂帯が陸地で連続していると必ずしも断言できないということである。これまで近世期に見られる和歌片男波の洲崎(砂嘴)と同様な砂嘴が、中世段階において南の毛見から北へ、布引まで伸びていると理解してきた。しかしこれは自明の事実であろうか。この毛見崎から伸びたとされる砂嘴についてそれを証明した絵画史料や文書史料は存在するのであろうか。すなわち後述するように島状であるか否かについて、この絵画史料は何も語っていないのである。なおまた、砂帯の手前(東側)の形状も半ば海であるが、金雲で覆われ、砂帯の東側が入江で閉じているとの証拠を提供することもない。

ついで、左右襖絵の下部について、河口の形状の変化に関係するので詳細に検討しておく。まず、左下には三葛村の浜に漁師二人が大きく描かれており、さらに五本の網で杭に繫留されたひらた舟が五艘描かれている。ただし一艘の舟の船体全体は描かれていない。つまり舟の繫留状況に力点が置かれ描かれている。一人は網を傾げ、一人は釣棹を持ち腰蓑姿である。漁師は舟に近づいており、漁のため自らの舟に乗り込もうとしている。この舟は川漁や沿海の釣り漁に利用されると見られる。ただし一艘の舟は鳥居のような乗船者捕まり木枠が設置されている。これは漁ではなく川輸送のために必要な設備ではなからうか。

第1表 小物成(塩)高一覧

村名	A 1601年	B 1868年
坂田△	29.206	121.576
田尻△	22.224	47.284
中嶋△	68.919	36.216
杭ノ瀬	50.261	31.522
小雑賀	107.295	97.919
三葛	76.206	55.791
紀三井寺	49.542	81.9297
内原	24.202	161.41
和歌○	106.251	91.662
関戸○	25.074	9.24
塩屋○	36.92	0
計	596.1	734.5497

A「紀伊州検地高目録」〔小物成〕

B「御領分御高井村名帳」〔塩浜通り小物成〕

単位は石、△和田川沿い、○和歌川右岸

また、岸から離れて雑賀川を二艘の舟が上下している様子が描かれている。舟の後ろには波筋が描かれ、かなりの速度で移動していると推測される。手前の一艘には木柁があり、船体のほぼ全体に、低い莖屋根がかなりしっかりと設えられている。これは物資輸送用の舟であり、川交通の主役である。

右下部には津屋村(和歌村の一部)の浜辺では、舟大工が舟を建造し、一艘は今進水しようとしている。この点はずでに指摘がなされているが、さらに下部右隅にはかなり大きな屋形船一艘と、莖屋根ひらた舟二艘が描かれている。その数の多少はさておき、上陸させて、木柁の上に多種の舟を保管しておく場所のように見られる。すなわち舟置き場があった。雑賀川の河口部にはこれら舟関係の場所が描かれており、三葛村・津屋村において、これら舟関係の生業が当時の主要生業であったことを表現している。

ちなみに、中世末〜近世初期に和歌川の沿岸諸村には塩浜が広く展開し、慶長六年(一六〇二)検地でその生産力が小物成高として登録されている(第1表)。本障壁画の続きである北面壁画には天神社前の塩浜、汐汲み・汐掻きの様子が描かれているが、和歌川沿いの三葛村・紀三井寺村・和歌村の浜に塩浜は一切描かれていない。存在しなかったのではなく、全てを天神社前の塩浜に象徴させたのではないかと考えられる。

## (2) 寛永期の「布引島」―紀伊続風土記の記事分析

『紀伊続風土記』の布引村の項には次のような同村の来歴が記されている。



寛永記にもと布引の松とて古松二株あり、今は枯れたり、是より南に列松連り(中略) 布引郷の名、国造家旧記に見ゆ、<sup>②</sup> 布引浜の名、国造家所藏文明元年毛見浦上書の文に出たり(注略)此地古の名草浜の地にて〔名草ノ浜の事、宮郷毛見浦に〕、其後御里と呼ひて、戸数一千余もありしといふ、<sup>④</sup> 寛永記に布引島南北十二町四十間・東西四町卅間の文あり、<sup>⑤</sup> 天和記に畑二十八町五段余あり、天神を氏神となる文あり〔天和記に今に田地を堀れば瓦など出といふ、寛永記に布引天神一社、方三尺板葺、昔は六月十八日当社へ観音祭も共に絶たりといふ〕、<sup>⑥</sup> 其後津波などにて人家も絶え、田地も海浜の砂磧場(スナハ)となれり、<sup>⑦</sup> 寛文元年南龍公命して此地を開発せしむ、此時、<sup>⑧</sup> 三葛村の民百坪余の地を開発す、<sup>⑨</sup> 公又命して西瓜・胡瓜を植しむ、

この内容は整理すると次の三つの内容、三段階に分けて理解される。

第一に、国造家の文書・記録によれば、中世において「布引郷」「布引浜」「文明元年(一四六九)」があり(①②)、戸数は一千戸もあったが(③)、津波などによって「砂磧場」「砂場」となった(⑥)。

第二に、寛永年間(一六二四～一六四四)の記録と推定される「寛永記」によると、当時この地の形状は「布引島」であった(④)。東西四町三〇間(約四九一m)・南北二町四〇間(約一三八一m)、面積は約五七町歩(約五七ha)<sup>17</sup>。南北約一・三八kmは近代の地図(第1図)では、北の端から亀ノ川の少し北の道路が東に折れている辺りに該当する。第三に寛文元年(一六六一)藩主徳川頼宣が開発を命じ(⑦)、これに応じて三葛村村民が一〇〇坪余(三畝余)を開発した(⑧)。また西瓜・胡瓜の栽培が勧められた(⑨)<sup>18</sup>。

第一の点については中世の記録に見える「布引郷」と近世布引村の関係は曖昧なままで、議論がなされていない。文明一年(一四七九)に飛鳥井雅親の和歌浦遊覧の際、「毛見浦」の繁栄が記され、複数の舟が着岸する「布引」の存在が分かる一方、「布引浜」については地名のみで地域の状況は不詳である。

第二の点はこれまで指摘されたことがなく、引用されていない重要な記載と言えよう。すなわち、「島」ということとは、布引の土地の南端は毛見浦と繋がっておらず、おおむね亀の川辺りで南北に切れていたということである。

冒頭に紹介した蓮如の紀伊紀行文には、藤白から北方眼下の「嶋や小嶋ヲナカムレハ」「布引ノシロキハマ松」が見えたとあり、「布引」＝「嶋」であった可能性が示唆されている。一五世紀七〇年代には布引が島であったことは間違いないであろう。なお、⑤の津波等による人家の所在滅失については、編者の「其後」が何時を指すのか、あるいは客観的事実として何が想定されるのか、滅失事実が存在するのか検討課題が残るが無視できない記事である。第三の点にも関係するが、藩の布引開発誘導の結果、三葛村民の入植(出作というより移住を伴うとみる方が自然であろう)という事実は、布引島の荒地化が前提となる。おそらく人家も消滅していた可能性が高い。<sup>20)</sup>

ちなみに万治三年から寛文一一年(一六六〇―一七一)作成の「和歌浦図屏風」<sup>21)</sup>には「布引村」の地名とともに人家が五軒以上(絵が切れているためそれ以上は不詳)描かれている。これは上記の事実と符合する。また同図によると、島の東側は海となっており、島北部東岸と紀三井寺集落西岸との間に木橋が架かっているのが描かれている。近代の地形図(第1図)によると、内原集落の東部より半斉川が紀三井寺門前へ流れているが、同川の両岸地域、さらに上流地域(室山・根美山の東西)はかつて(近世以前)、大きな入り海であったと推測される。そして、入り海の出口の一つが紀三井寺集落西沿岸であることは勿論であるが、もう一つは布引島と毛見崎の間にあったと考えられる。布引島の南東端に「尾崎」、(亀ノ川を挟んで)その対岸(南側、毛見浦領地)に「出口」という字が残っており、ここに海峡があったとみられる。<sup>22)</sup>

さて、島状から砂嘴と見紛うような陸続きとなったのはいつ頃であろうか。地形変化を考える上で留意すべきは片男波砂洲の成長とその要因である。すなわち、紀ノ川本流への土木工事、和歌浦への流量減少が片男波の砂洲を長大に成長させた。<sup>23)</sup>「寛永年間に於いて…和歌浦ニ注ケル分流ヲ締切り…紀ノ川分流ヲ遮断シタル為メ…出島洲崎半島ヲ形成スルニ至リタル」<sup>24)</sup>などの指摘がある。寛永年間の分流遮断工事が何かが明示されていないが、近世城下町建設による水路建設等、城下町の形成がこの時期迄であることを参照すれば納得できる。砂洲形成の時期について

はずでに幾つかの指摘で、江戸期の寛永年間であることがほぼ確実である<sup>(25)</sup>。

片男波砂洲形成は、和歌浦湾の雑賀崎からの東向き潮流が運ぶ砂によってなされたと理解されるが、とすれば、その同じ潮流が布引島と毛見浦の浜をつなぐ砂を運んだと考えることは、方向性からしてあり得る。すなわち和歌浦湾北部の片男波砂洲の形成動向と、同湾東部の布引島の陸地化(毛見浦との接続)動向とはほぼ同時期であり、同じ原理によってなされたと理解することは可能であろう。すなわち布引の地は毛見崎から延びて形成された砂嘴ではないことが注目されねばならない。

最後に、第三の点は西瓜栽培だけが有名であるが、寛文元年(一六六一)の当初の開発地が一〇〇坪余ということ、西瓜・胡瓜の試作も大規模なものではないことが分かる。『紀伊続風土記』の記事⑤によれば天和年間(一六八〇〜一六八五)の畑地は二八町五反歩とのことである。後述のように上記の島の面積が約五七町歩であるから、約半分が耕作地(畑地)となっており、開発が急速に進んだことが分かる。ただし、そこで栽培されるものが西瓜・胡瓜ばかりなのか、これらの耕地状況については次の章で検討する。

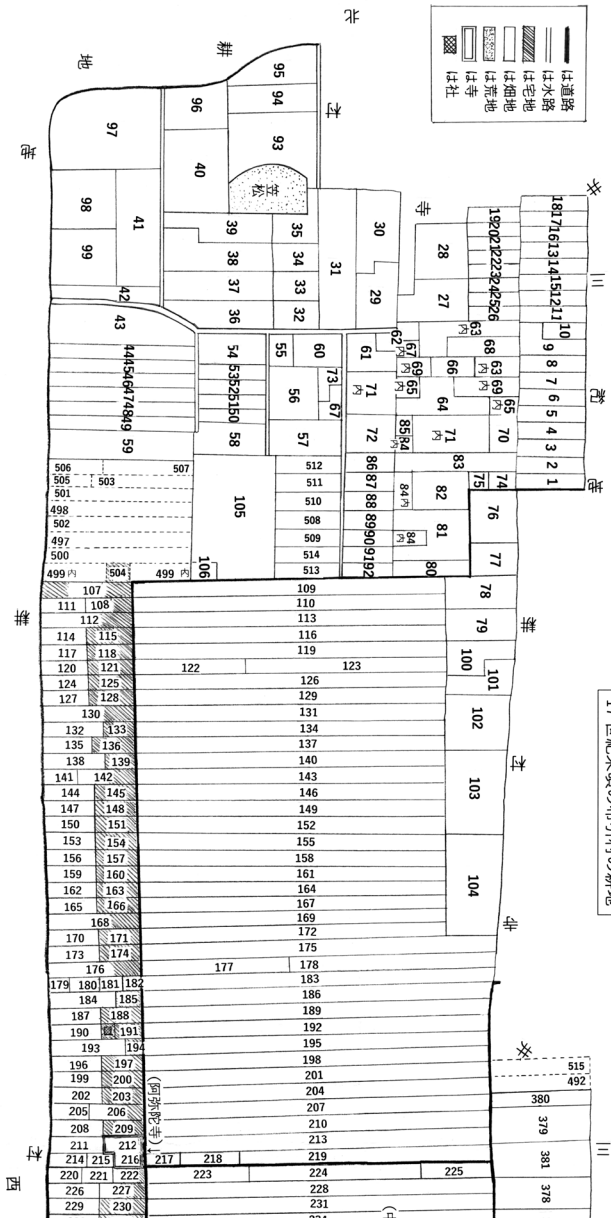
以上本章では、中世における布引の形状は島状であり、和歌浦湾内の海上交通や商工業・農業において盛衰があり、自然災害で滅失、再興の過程が存在したこと、近世以降は寛永年間以降に陸地化が達成され、一六六〇年代から三葛村民の入植があり、一七世紀後半期に畑作地が形成されたことをのべた。

## 二 近世布引村開発史―明治初期「布引村図面」の分析―

### (1) 「布引村図面」の分析

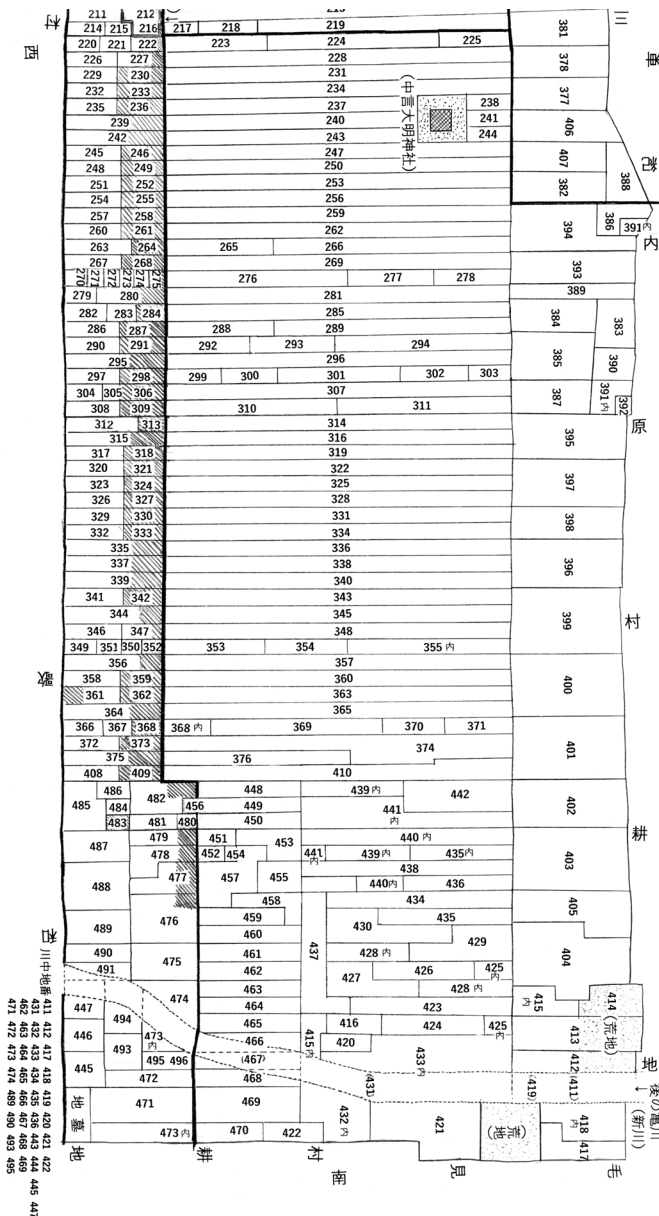
次に第3図を提示する。明治七年(一八七四)作成の「布引村図面」が残されているが、同類の絵図面として、明

17世紀末頃の布引村の耕地



近世布引村の開発と和歌浦湾東部の景観

※



※ (4頁以降より抜く)

第3図 17世紀末頃の布引村の耕地復原図

治七年頃伊都郡「東村地所図面」<sup>26</sup>や明治七年「紀伊国名草郡木ノ本村・榎原村・小屋村三ヶ村耕地全図」<sup>27</sup>がある。

第3図は「布引村図面」(原画の写真)を鉛筆でトレースし、一七世紀末頃の耕地開発時の様子を復原したものである。この原図の作成年代は田・畑・宅地・池川溝・山・社・寺等の表記が共通していることから、和歌山県によりあるガイドラインで作成が指導されたもので、明治七年現在のものと推測される。後掲「三葛村図面」(内題「紀伊国名草郡三葛村地引之図」)も同様である。ちなみに、明治四年(一八七二)同村の毛付け面積は五五町六反余畑地で、内木綿作が三七町八反余、薩摩芋作六町五反、大豆・黍・大角豆作が二町八反余、茄子・多葉粉作が二町四反であった。<sup>28</sup>

この図面の表記を手がかりにして、江戸期の耕地と集落の形態を復原するが、まず図面の表記の内、布引村周囲の記載から見ておこう。図面の周囲、北・東は紀三井寺村耕地、東・南は内原村耕地、南は毛見村耕地、西は和歌村耕地と接していると表記されている。西は厳密には海岸線であり、和歌村の「耕地」ではなく、海(和歌浦湾)と接している。<sup>29</sup> 本図面はかなり横(南北)に長い長方形である(縦五八cm×横二二六cm、概ね六〇七分の一の縮尺)。実際の地形は第1図のように、南部が約一〇〜三〇度東へ振っており、図面作成上の便宜でデフォルメされているが、土地形状を検討することは可能であろう(平行四辺形の実際が長方形に表示されている)。

次に地番を検討しよう。布引村の場合、寛文元年(一六六一)から開発・入植が始まったから、その地番はその後土地が登録(高付け)され、それが継承されたと推測される。

中央部に中言大明神社の社地がかなり大きく描かれている。西2337番・2440番・2443番と2338番・2441番・2444番の間にあり、その敷地は東西二二間・南北二二間、約四八四坪と推測される。同社については「寛文中三葛村より勧請す」とあり(『紀伊統風土記』同村の項)、開発時からの鎮守社として村領のほぼ中心部に設置されており、耕地開発、村形成のシンボリックな存在であったことが理解される。<sup>30</sup> したがって、地番の登録は寛文年中

(一六六一)～(一六七二)より以降であることがわかる。

一方、紀州藩領では、近世初期の慶長六年(一六〇二)以降、新田畑の体制的な追加登録(新田畑地詰検地)は元禄一七年(一七〇四)・宝永四年(一七〇七)になされた場合が多い。元禄一七年の翌宝永五年(一七〇八)には「大指出帳」が作成されている。<sup>31)</sup> また同時に、図中右端に亀ノ川(当時「新川」、旧水路<sup>32)</sup>後の半斉川に対する新水路呼称の流路があり、登録され、地番の付されていた土地が「川成」となったが、実在しない地番が川筋上に記されている(原図では川筋に書き込まれている地番を右下欄外に一括して記した)。亀ノ川の開削は宝永四年であるから、布引村の地番登録はそれより以前、元禄一七年(宝永元年)の可能性が高い。川筋上に記された地番で最も大きな番号は495である。全ての地番は515までである。496番～515番の土地についてその年代は留保されるが、図面のほとんどの土地は一七世紀末頃に存在し、この図面に記載された。なお、原図では新畑筆に「○」印を付するルールであるが、この図の全ての耕地にそれが付されており、明治初期、布引村の耕地は全て畑地であった。遡って、開発後江戸期を通じて畑地であったと見られる。<sup>33)</sup>

また入植後約二〇〇年を経過する中で、土地所持者が土地を売買・譲渡するため分筆する場合が多くあった。原図では「( )番内」という表記が多数見られる。ここでは元の一筆の姿を復原しようとしているので、隣接している分筆は合体して分筆線引きを消去した場合が多い。しかし、売買・譲渡の過程で番号が入れ替わり、分筆された同じ番号が離れてしまう場合もあり、離れている分筆番号は「( )番内」を残して表示した(同じ番号が二ヶ所以上見られるのはそのためである)。なお地番443・444の場所は不明。

つぎに「宅地」について検討しておく。江戸期の土地台帳では村民居住地は「屋敷」「居屋敷」「いやしき」と表記される。原図で「宅地」は白色で表示されており、トレース図では斜線を入れた。江戸期の土地台帳ではおそらく「屋敷」等と表記されていたと見て間違いない。中央部南北に大道が通っているが、その北端に504番宅地が

一筆のみ位置し、集落内南北の大道沿いに、北の方107番宅地から南の方、道の折れ曲がる409番宅地までに九四筆(361番と362番は同区画内にある)ある。さらに道に面していない361番、折れ曲がり角より以南に道に面して七筆、奥に一筆(483番)がある。つまり宅地は全一〇四筆ある。『紀伊続風土記』によると一九世紀初め頃の家数は九九軒であり、万延二年(一八六一)の「浦組人数御改帳」<sup>(33)</sup>によると一〇四軒とあり(寺を除く)、この屋敷地数は明治初期の宅地の数とほぼ一致する。

ところで、107番〜409番ではほとんどの場合、道の西側に宅地と畑地がセットとしてあるが、その一区画の大きさは実際にはどのくらいであろうか。寛政九年(一七九六)「布引村領新畑之内、和歌川口御番所屋敷地畝高改帳」の記事によると、地主文太夫の土地(八〇坪)を川口御番所用地に買い取ることになったが、その東西・南北は「東西拾間九分六り・南北七間三分」であった。細長い土地の幅(南北)は一三m余であり、現在の地形図(国土基本図)に見る同地区の土地の南北幅と合致する。ちなみに大道より西側の土地区画の東西(奥行き)は南北の約六倍の四二間(八〇m弱程度)で、現状では八〇m〜一〇〇mと、ほぼ合致する。

とすると、大道から西の宅地を含む畑地の一区画は約三〇〇坪(七・三間×四二間)＝一反である。また現在、道より東側の一筆は(場所によるが)おおむね三〇〇m前後であり、この区画の中央部畑地一筆の東西(大道より東)は一三〇〜一六〇間前後で、その帯状一筆の面積は(東西一五〇間として)約一〇〇〇坪、三反歩の規模と見てよい。要するに一七世紀後半のある時期に、道沿い屋敷地一反と、東西一五〇間、南北幅七間余の四反歩の居住地+耕作地という分譲地を用意し、計画的に入植を図ったと推測することが可能であろう。布引村の開発はこの耕作地空間を基本とし、さらに大道の屈曲より南はその原理空間(道沿い屋敷地設置)の延長として追加開発されたものである。しかしこの原理は途中で切れており、一〇〇軒を大きく超す入植とはならず完結している。

ちなみに、西側海沿いの畑地は汐害も強く、耕作地というよりはバッファゾーンとしての機能が期待されていた



と理解される。また南北幅を短くしたのは、自然災害による生産上のリスクを均分化するという、都市の町並み(間口均一化)の発想から転じたものと見られる。

付加的に説明を加えると、大道沿い区画に九四筆あるが、107番内の二筆は同じ番地の(明治七年までに分筆)分筆宅地であり、当初は一区画に屋敷地は一筆とみられる。また361番362番は同一区画に存在するが、元禄一七年頃の登録時すでに二筆に権利が分筆されていたため、番号が二つ付与されることとなった。このような例はこれ以外に存在しない。また212番・216番の阿弥陀寺は享保五年(一七二〇)藤白浦からここに移転してきたから、それ以前は個人宅地であった可能性がある。

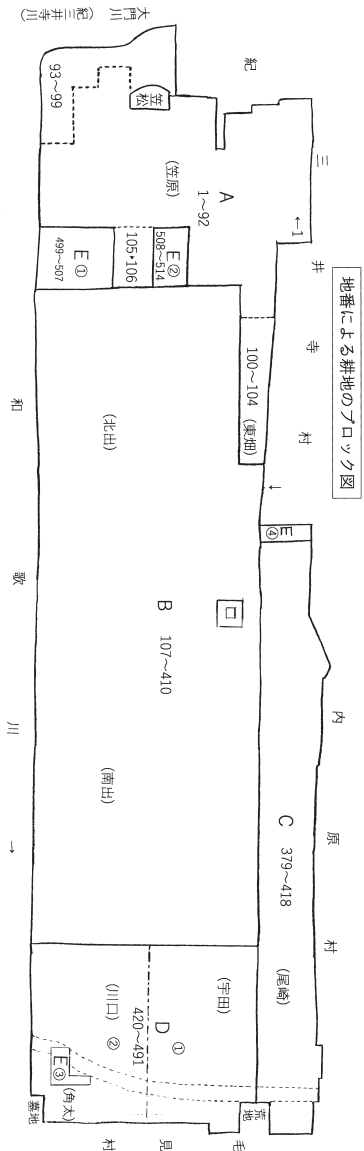
このように細かい点も含めて整理すると、地番が付され登録された一七世紀末頃から、家数(屋敷地筆数)はおおむね一〇〇軒前後で、二〇〇年間それが維持されてきたと見るのが自然であろう。

## (2) ブロック別分析―開発史

第4図は地番ごとにA～Eの五ブロックに分け、同村の開発の歩みを辿ってみるための作図である。

Aは地番1～99のブロックである。寛文年間頃の様子を描いた「和歌浦図屏風」(前出)には布引北部に「布引松」と記され、松数本が群生している様子が描かれているが(第2図群生の松を継承か)、これは第3図北部「笠松」(地番無し荒地)の地に該当し、その小字呼称が若干変化して継承されたとみられる。

Aの北・東は紀三井寺村耕地と接し、その中でも1～26は幅の狭い小さな耕地片、一方27～31はやや大きめの畑地で構成されている。76～79番、100～104番も同村の隣接地でかなり大きい耕地である。これらA東部の耕地へ三葛村集落からアクセスするには、三葛村中心地から舟で紀三井寺門前に繋がる堀を南進し、半斉川を少し遡るルート(水上約1km)か、紀三井寺村内を南北に通る道(後に熊野街道)を経て、同村集落南で西方の道へ進み、橋



※原図 和歌山県立図書館所蔵「布引村図面」  
 ※字は法務局蔵 明治24年地籍図による

第4図 地番による耕地のブロック図

を渡り第4図←印(東畑とEの中間)に着き、布引村内を少し北上するという歩きルート(約2km)を移動する必要がある。いずれもごく近くの出作というのではなく、経営上必要に迫られてのやや遠隔地出作とみられる。

一方、A西部の27〜72番には水路が各所に伸びており、海と繋がっているという特徴がある。この水路がいつ頃造成されたかを確認する史料はないが、三葛村村民の海民としての活動を第一章の障壁画は示しており、橋本塩市への川舟輸送に従事した同村民(「舟の民」)が、布引村北部の開発時から舟運用水路を確保したことはあり得ることと判断される。ここから三葛村村民固有の海越え出作、開発が始まったのではなからうか。一筆の土地は带状の耕地も含まれるが(正方形に近いものが多い。西瓜生産を前提とすると、商品の輸送、販売には舟便は最適であろう(城下への輸送が容易である)。

ここで確認しておくべきことは、二種類の開発方式を包含するAブロックと、一律带状地の計画的利用のBブロックはどちらが時間的に先になされたかということである。一般に地番の若い方が先に開発されたとみられるが、

Bブロックに入植後、北部の開発に着手したとも考えられなくはない。そこで注目したのは、「東畑」の小字ブロックの形状である。仮にBブロックがさきであれば、「東畑」地区が食い込む形とはならないであろう。Aブロックが先で、「東畑」は既に開発され、土地所有者が耕作してきたので、「北出」地区の带状畑地は南に比べやや短くならざるを得なかったと理解される。すでに述べたように、布引村は三葛村からの入植で成立するが、107番以降の带状耕地の拡がりには当村開発の到達点を示している。開発初期に中言大明神社は丁度Bブロックの中央部に勧請され、設置された。そこ中心に「北出」「南出」という小字がついた。

海拔についてみると、北部Aブロックではほとんどが2m未満、Bブロックの中央部が2.5～3m未満、南北に繋がる屋敷地(集落)は2m前後、西海岸近くは1.5m前後と低い。なお、東側の紀三井寺村・内原村の耕地は1m台とかなり低い。Bブロックは低湿地ではない砂地農業が、Aブロックは低地ではあるが、矢張り砂地農業が適していた可能性が高い。

次にCブロックは内原村と接する耕地で、Bブロック入植後に畑地拡大のため、内原村界が開発された。Cブロックの海拔は大概2.5～3.0mであるが、内原村では2m未満(1m代)である。

元文五年(一七四〇)七月、紀三井寺村藤吉は「布引・内原両村領分」である「高畑」の「際」に、紀三井寺村領五畝半・内原村領一反六畝弱の新畑を所持しているが、その畑地地面を「壹尺式三寸程」(約40cm)「床上」のため「入土」したいと出願した。<sup>39)</sup>この土地は低く「透潮」し、「不絶湧水出、地面しつき」<sup>(湿気)</sup>ている。「湧水抜き捨テ申様二地底へ石水道・川原渡井伏せ」<sup>(井)</sup>たが、なお夏作で「内原村小物成田畑へ稲毛仕付」ける時は「用水」が「閑溜」<sup>(たまり)</sup>るとしている。

このようにCブロックの東側では土地が低く水はけが良くない状況が分かるが、それらの内には「小物成田畑」が含まれていた。ここの「小物成」とは冒頭に紹介したように塩年貢のことをさす。つまり、近世初期の「小物成

場「塩浜」は一八世紀半ばには新田畑となっていた。このような生産状況の悪い東の隣接地にくらべ、Cプロットの土地は微高地にあり、砂地農業の適地であった。入植者は競って耕地拡大に努めたと推測される。

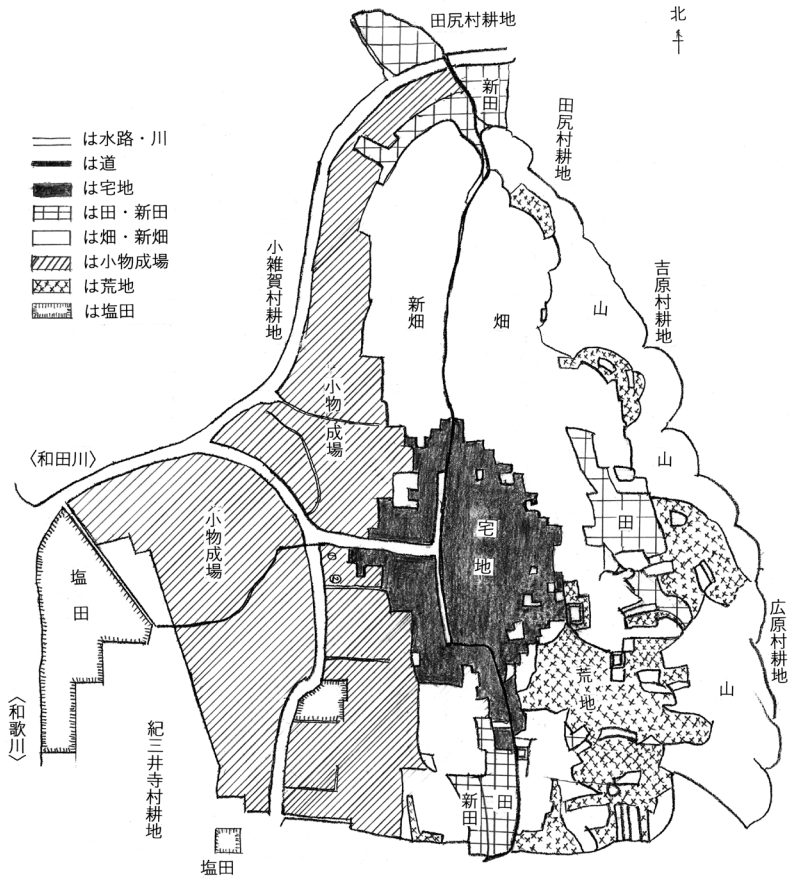
Dプロットの耕地の形は①と②で異なっている。①は帯状を基本としながら再分割されており、②では大道の延長の道と、西にもう一本の裏道が設けられ、屋敷地の追加、耕地拡大が見られる。Eは①②③④の四ヶ所追加、付け足した耕地開発である。ちなみに、①は帯状小耕地で八本の耕地に分割されているが、ここも西海岸にあり、自然災害のリスクの均分化の対応がみられる。要するに、Eは残されている空地の開発が後からくまなく進められ、全体の開発終了を迎えた。これらの開発は寛文元年（一六六一）頃から天和年間（一六八一～八五）をへて、元禄一七年（一六九七）以前迄に、三〇年前後の期間に進行した。

### （3）「三葛村図面」の分析（付り）

第5図は「布引村図面」と同じく明治七年頃作成された「三葛村図面」（内題「紀伊国名草郡三葛村地引之図」の原画写真を鉛筆でトレースし、土地利用表記を変えたものである。大きさは縦（東西）一〇〇cm×横（南北）一一五cmで、ほぼ正方形である（描かれている村領の南北は約1kmであるから、千分の一弱の縮尺）。この図面の分析から、何故三葛村から布引村に入植したのかについて検討する。

まず宅地を通る南北の街道の右山側の宅地は近世初期からのものであるが、左側の宅地には「○」印が付されている、原図の説明では「新田畑印」となっており、ある時期以降の宅地と分かる。田・畑についても街道より西側は新田畑の場合が多い。荒地は、近世期に一旦は山の麓や中腹に開発が及んだが、明治初期には耕作放棄されたものであろう。

さて注目されるのは「小物成場」である。冒頭で触れたとおり、慶長検地段階で「小物成」高（＝実質は塩年貢



※原図「三葛村図面」(和歌山県立図書館所蔵)を著者がトレースし、加工して作成。

第5図 明治初期、三葛村土地利用図(耕宅地等分布図)

高)の表記があった。宅地・田畑地と区別してこの種類の土地が明示されている。場所は、全体として街道より西側、水路が通じている和田川・和歌川に近い方面に広がっている。これらは正保二年(一六四五)住吉如慶作「紀州若浦之図」に朱文字で「塩はま」と書き込まれている<sup>⑩</sup>。近世初期には塩浜が三葛村・紀三井寺村の沿岸部に存在した。第1表によると上から杭瀬村約五〇石、中嶋村約六九石、小雑賀村約一〇

七石、三葛村約七六石、紀三井寺村約五〇石、和歌村約一〇七石である。仮に一反につき二石として各村二町五反、五町歩程度の広さである。<sup>(41)</sup>

しかし、この原因ではこの種類(同色)の筆全てに「△」印<sup>42</sup>「小物成田畑印」が付されている。要するに明治初期には田畑であると追加表示されている。いつ頃変化があり、変更が行われたのか。先に紀三井寺村村民が所持する畑地の床上げ願書を紹介したが、この願書に「内原村小物成田畑」と出てくる。すでに塩浜でなく、稲を植え付けている。このように遅くとも一八世紀半ば頃には塩浜の実態は変化している。

第5図には「小物成場」の西側(川側)には「塩田」が存在している。明治一九年(一八八六)頃の第1図には三葛村の「塩田」と隣接する紀三井寺村の「塩田」が表示されている。要するに、近世中期以降明治前期までの「塩田」と「塩浜」とは別の土地空間であった。第1表の慶応四年(一八六八)の数字は一八世紀初めの塩浜検地による高がスタートと見られる。一八世紀以降の石盛は担当五石設定であるから、面積は減少の可能性がある。三葛村の沖の塩田面積はかなり減少している。紀三井寺村でも沖へ移動し、面積は同程度であろう。小物成(塩)高は各村で変化しているが、場所の移動が伴っており、近世初期からは激変していることに注意する必要がある。<sup>(43)</sup>

三葛村や紀三井寺村で何故このような現象が生じたか。おそらく、近世前期の寛永年間に和歌川の水量が激減し、(片男波の砂洲が伸び、布引島が毛見浦に接続したのと同じく)和歌川河口部に近い場所では川幅が狭くなり、元の「塩浜」は陸地化し、より沖合に塩浜状態の土地が生じたことによるのではないかと推測される。

当初の課題である入植の理由、事情に関しては、このように三葛村で塩浜稼ぎが減少したため、余剰労働力が布引島へと入植移動したのではないかとの見通しを提示しておく。さらなる今後の実証が必要である。

以上第二章では一七世紀中葉期からの布引村の開発史を辿ってきた。ある時期、地理的条件(汐害)を勘案した計画的な開発が集中的に行われた。三葛村からの入植は、一七世紀の早い段階で生じた和歌川の変化(水量激減)によ

つて三葛村沿岸での生産活動に大きな変化を齎したと連動していることをのべた。

### おわりに

主に絵画や絵図面の表記を手がかりに、和歌浦湾東部に位置する布引村および和歌川河口三葛村の景観と耕地開発史を分析してきたが、最後に要点をまとめておこう。

第一章では、近世初期の布引の地形状況を確認するため周辺全体の景観を確認した。すなわち名古屋城の障壁画西面二枚には和歌浦湾東部の景観がかなり忠実に(実景に近く)描かれているが、一方、注目する布引島と毛見浦の間の様子は雲に隠されており、繋がっていることは証明できないことが確認された。和歌川筋の三葛村・津屋村の舟利用の様子も描き込まれており、関連する生業の展開が読み取れた。

また『紀伊続風土記』の記事の精査等から、戦国期～近世初期には「布引島」が存在し、一六六〇年代までに布引・毛見地区が接続し、その頃から布引地区への一挙入植と耕地開発が進展し、一七世紀中に全域の開発が終了し畑作地が形成された。

第二章では明治初期の耕地図面から、当初の開発耕地には水路があり、三葛村の住民に適した開墾が行われたことや、地区の広域をしめる帯状分譲地は汐害リスクを均等に分散するなど、立地諸条件に見合う計画的な農地割という特色が見られた。東の入江(布引島・毛見浦接続後)を抱えた内畑村領土地・紀三井寺村領土地よりは相対的に耕地条件が良く、離れた三葛村からは進んで当地へ入植する条件があった。また三葛村の耕地図面の分析から、かつて近世初期に和歌川可耕地に特徴的な「塩浜」が広く存在したが、(おそらく和歌川の水量減少に起因して)陸地化が進む一方、一〇〇年後にはあらたに「塩田」が形成された事実を突き止めた。当初の「塩浜」(初期塩田)経営

の困難性が布引村入植を促進したのではないかとの推測を行った。

以上、「布引島」の発見、帯状耕地を伴う特徴的な地割と入植の発見、「塩浜」と「塩田」の区別などが結論であるが、和歌浦湾の東部景観の形成と片男波砂嘴の形成とは関連しており、当地域の景観変容、近世景観の形成という展開と相互関連を解明した。

## 注

(1) 武内善信『雑賀一向一揆と紀伊真宗』(法蔵館、二〇一八年)六一頁。「や嶋」は見せ消しで「ノ山」と修正されている。

(2) 文明元年(一四六九)日前宮の記録「毛見郷百姓言上状」(官幣大社日御神宮國懸神宮本紀大略)所載)に布引浜耕地のことが見えると紹介されている(『角川歴史地名大辞典』「布引」の項)。

(3) 例えば地理学研究者である小林護氏は現状地形について、「海岸部の毛見と布引の集落をのせている船尾山の西端から北へのびる傾斜の緩やかな新しい砂丘である」(『砂地農業の特色と変遷―名草地区の場合を中心にして―)、『和歌山地理』第五号、一九八五)。ここでの「新しい」とは、「内原の集落をのせている名草山南麓から南にのびる古い砂丘」との対比で用いられている。なお、内原村については和歌山地理学研究会「伝馬所のあった村―和歌山市内原地区の研究―」(一九六三年)が取り上げている。

(4) 『和歌山県史 近世史料三』(和歌山県、一九八一年)収載。近隣村落の村高は、三葛村二九八石余(小物成高七六石余)、紀三井寺村五百八拾石余(十四九石余)、内原村八〇四石余(十二四石余)、毛見村五九五石余。

(5) 『角川地名大辞典 和歌山県』(角川書店、一九八五年)の同村の項には「元禄郷帳」に「三葛村枝郷」と記されているが、「元禄郷帳」の記載については未見である。

(6) 名古屋城総合センター所蔵。米田頼司氏をはじめ実景的な絵画史料として歴史的な分析をした(名古屋城障壁面に描かれた和歌浦天満宮とその社頭)、和歌山大学紀州経済史文化史研究所編『和歌浦天満宮の世界』清文堂二〇〇九年、後に同氏著『和歌祭―風



流の祭典の社会誌』帯伊書店に所収、二〇一〇年）。

(7) ともに和歌山県立図書館所蔵。前者の請求番号はC811835、後者はC81184。

(8) 和歌山大学紀州経済史文化史研究所所蔵。

(9) 名古屋城総合センター所蔵。本絵画史料の性格とその評価については米田頼司氏前掲注(6)論文のまとめによる。この襖絵に描かれた人文的な景観の諸要素は実在するものであり、この襖絵が全く抽象的な名所世界を描いたものではないことが確認される。そのことは、この襖絵に描かれた自然景観についても実在的なものであると推定することを可能とする。抽象的理念的名所絵であり、描かれた自然景観は実態を反映しないと実在性を否定する必要はない。

(10) 三重の塔については若干議論の余地がある。室町桃山時代の「紀三井寺参詣曼荼羅」(紀三井寺所蔵。和歌山市立博物館編『和歌浦―その景とうつりかわり―』二〇〇五年)では三重塔ではなく多宝塔が描かれている。

(11) 天神社を描いた北面壁はおおむね北東方角から描いており、対をなしている。このような絵画技法として注目される。

(12) 前掲注(6)米田二〇〇九年論文でこれを「紀三井寺門前の漁師の家」(一三九頁)と評価しているが間違いであろう。

(13) 現海南市黒江古墳が二基存在する。現智弁学園がある根美山の西隣の山。

(14) 船尾山と毛見崎の続きや、藤白坂の峯と大崎の峯の関係は稜線の前後(手前・向こう)表記は必ずしも正確に描かれていない。

(15) 前掲注(6)米田二〇〇九年論文一三九頁。

(16) 拙稿「近世玉津島の景観と古代『明光』―『荒磯』の発見から―」(『和歌山地方史研究』八三号、二〇二二年)三頁。

(17) 元文五年「毛付見分願書」(同年「諸御用留帳」、桑山家文書、和歌山大学紀州経済史文化史研究所所蔵)によると同村の面積は新畑五七町と記されている。

(18) この内第三の西瓜栽培だけが後世に注目され、伝承されている。『紀伊国名所図会』には西瓜栽培の絵が掲げられている。

(19) 海津一朗氏「文明十一年 飛鳥井殿下向之儀式」―惣国の風景―(『和歌山地方史研究』四六、二〇〇三年)。ちなみに「戸数一

千余」③は大きな表現の定番であるが、備後芦田川下流の草戸千軒が想起される。そこは中洲の島であるが、中世海民の生業とその繁栄からは陸続きである必要はなく、布引も同様な想定が可能であろう。

(20) 前掲注(5)のように「元禄郷帳」にある「三葛村枝郷」との記載は布引島の無人化、荒地化と整合的と言えよう。

(21) 和歌山市立博物館所蔵、前掲注(10)同館刊行の図録「和歌浦」に掲載。寛文元年入植の始まりとすれば、この絵図の作成は入植開始の寛文元年より後、同年間(一六六一～一三三年)の遅い時期と推定される。

(22) 中野栄治氏採集の法務局所蔵明治二四年(一八九二)地籍図の小字。もと海峡が近世初期より前期に繋がり、一八世紀初めに人工的な流路が作られ、再び切断されたと理解される。屹立した島でなく、不連続な低地が存在したと推測される。

(23) 前掲注(6)米田論文一三三頁末。

(24) 和歌山間内務部土木課編『和歌浦海岸災害復旧誌』一九一四年、二頁。ただし和歌川を本流近くで遮断したという事実は実証できない。誤認であろう。

(25) 砂洲形成のため和歌浦の出島集落が寛文期以前に移住形成されたこと、一六二〇年頃作成の名古屋城障壁画の考証により、その段階では砂洲が未形成であったが、正保二年(一六四五)の「紀州和歌浦之図」(東京藝術大学所蔵、前掲注(10)図録に掲載)に長大な砂洲が描かれていることから、その間の寛永年間が有力である。前掲注(16)拙稿でもその主旨を述べたが、一ヶ所誤りがある。「近世以前のある時期に砂洲が形成された」(一三頁、一四～一五行目)と記したのは「近世初期のある時期」の間違いであった。首尾一貫しない表記が残っていたのをここで修正しておく。

(26) 『かつらぎ町史 通史編』付図A・Bおよび巻末解説、二〇〇六年。

(27) その複製(青焼きコピー)が高橋家文書に含まれる。拙稿「近世初期、沖積低地村落の景観と耕地拡大」(紀州経済史文化史研究所紀要 四三、二〇二二年)

(28) 『角川歴史地名大事典』布引村の項。出典は「和歌山大学所有『毛付達』」とあるが確認できない。とはいえ元文五年(一七四〇)

- 「新畑五拾七町余 毛付」(前掲注(17)「毛付見分願書」とは矛盾せず、ほぼ確実な事実とみられる。参考として掲げておく。
- (29) その海上の利用権範囲は(護岸より一〇間の地先隔てて)和歌村利用権海面と接している。昭和二五年四月八日「藻屑川図」(布引浦漁業会長署名、服部龍男筆写図面、神奈川大学内常民研究所保管資料)
- (30) 社地とその周辺は海拔三mの微高地に位置する。
- (31) 例えば前掲注(27)「かつらぎ町史 通史編」六八四頁、二〇〇六年。
- (32) 後掲三葛村の場合は新田畑に「〇」を付けることになっており、この時期の図面作成方針とみられる。布引村に新田はない。
- (33) 桑山家文書(和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵)
- (34) 寛政九年(一七九七)「諸御用通留帳」(桑山家文書、和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵)に記載。
- (35) 現在も東西に細長い土地形状は崩れてはいないので、東西の短小化は進んでいるが南北の合筆(幅の拡大等)はほとんど見られない。
- (36) 前掲注(21)「和歌浦図屏風」の第六扇右下部に木製橋が描かれている。布引村側には集落の一部が描かれている。
- (37) 橋本塩市については「橋本市史 近世史料1」四九頁・四八三頁。「南紀徳川史」第一〇冊三〇八頁。
- (38) 近世後期、「紀伊国名所図会」掲載の西瓜畑は北部「笠松」の東側に描かれているが、西側を排除しないであろう。なお天秤棒ザルに入れて運んでいるが、不安定で落ちて割れてしまう。分かり易さを狙った構図とみられる。
- (39) 前掲注(17)所引元文五年(一七四〇)「諸御用留帳」。
- (40) 前掲注(10)和歌山市立博物館編図録「和歌浦」二四頁。
- (41) 拙稿「近世和歌の浦に歴史景観―その形成と変容―」(『和歌山地方史研究』一七号、一九八九年)。小物成高は「紀伊州検地高目録」『和歌山県史 近世史料三』による。一八世紀初頭期の市町前入江の塩田化に際しては、一四、五町歩に高五〇〇石とあり、初期の石盛を一反二石(上田に相当)程度と仮定した。和歌川のかなり上流(和田川合流地点をもさらに遡る)にまで海水が及び、近世初期の塩浜はかなり上流にも存在した。

(42)三葛村での塩生産はなくなったのではなく、より沖合に「塩田」が再生された。また紀三井寺村沖合も同様である。初期的な「塩浜」は対岸和歌浦(現秋葉山南東、和歌浦東地区)においても衰滅し、取って代わって川沿いや市町前入江に「塩田」が展開した。なお、一九世紀初においては入浜式への生産技術の変容が認められる(和歌山市立博物館所蔵「紀州和歌浦絵図」、前掲注(10)「和歌浦」四三頁掲載)。一七世紀初期の技術は揚げ浜式であり、一八世紀初期にはおそらく入浜式要素を持つ方式技術体系へ転換しつつあったものと推測される。「釣釜浜」式と呼ばれる方式もその一種である。宝永年間(一七〇四―一七一一)に検地があり、一反当たり(五石で石盛されるようになった)〔南紀徳川史〕第一〇冊三〇八頁)。内原村で飛躍的に増加した塩田は半斉川沿いの同村集落の東から南(毛見の耕地群との間に細長く展開したと見られる。東から下ノ塩田・塩入・前浜・中浜・下浜という小字名が残っている)中野栄治氏採集の法務局地籍図(小字)。初期に少ないのは布引島の南を通って海水が激しく流入し、安定的でなく、ここが閉じられることで奥深い入江への緩やかな海水遡上が塩田に適合的であったと理解される。前掲注(3)報告書で初期塩浜についてその存在が触れられているが、宝永七年(一七一〇)亀池開削後は水田化し、江戸末期には無くなったと記されているが(五頁)、初期よりも大きく拡大した一六一石余の小物成高の存在は否定できないであろう。

## 追記

一、一九九四年三月二日に開催された和歌山地方史研究会春季例会「名草山・名草浜の歴史的環境を考える」で、「江戸・明治期、布引地区の景観と農業」という報告を行った。本稿はその報告をもとにしている。故小山靖憲氏が布引村耕地絵図を必ず論文化するよう筆者に伝えられた。遅まきながら本稿においてようやくその約束を果たすことができた。

二、名古屋城総合センターから名古屋城の障壁画の原画写真の提供を受け、布引村・三葛村両村の耕地絵図面は和歌山県立図書館で閲覧し、写真撮影の許可を得た。心から感謝の意を表す。いずれもトレース図の方が分析論点を提示しやすいと考え、写真を下敷きにして鉛筆書きで自作したトレース図を掲示した。